## 「死ぬ時も、生きる 時も、目立たず に! |

その帰天に際して何も不思議なこと はなく、その生涯と同じようにごく 普通に亡くなりました。晩年の数ヶ 月間には、お話したように、死を望 んでいたわけではありませんが、神 と顔と顔を合わせて対面する望みが 高まっていました。1975年6月26日 の朝も、神のことに没頭しきってい る人特有の落ち着きと平和のうちに 過ごしていました。カステルガンド ルフォでの予期せぬ出来事を重要視 することなく、自分の卑小さをから かい気味に「心配を掛けることしか できない | と言っていたほどでし た。何度も私たちに、不慮の出来事 を引き起こしてしまったことを許し てくれるよう頼みました。

死期が近づいていることを知っていたかどうかは分かりません。私に言えることは、他の場合と同じように、目の前の危険を明らかに知っていたということです。それは、神は最も愛深い全能の父として、いつも

私たちに最もよいものをお送りくだ さると確信して、神に全てを委ねて いましたから。

その使徒職が絶え間ない祈りと根気 強い犠牲に支えられていた事を十分 に言い尽くすことはできません。子 供たちに次のような基準を伝えまし た。「オプス・デイにおいて全ての ことは祈りをベースにして作り上げ られました。」

して言葉には、神が心に入り込まれ、司祭職へと導かれた、あの時代への愛情溢れる郷愁が滲み出ていました。

1956年、アルバロ・デル・ポル ティーリョ師をある仕事のためにス ペインに送りました。二、三日して アルバロ師から届いた手紙に、「仕 事は手伝っている人たちのお祈りの お陰で旨くいっています」とありま した。オプス・デイ創立者は、手紙 から目を上げセベリーノ・モンソー 師と私に次のようにコメントしまし た。「とてもきれいなことを書いて います。子供たちよ、私もいつもそ うしていますが、私たちのお祈りで すべて旨くいっていると確信してい るのです。私たちは全ての仕事に先 立って祈り、祈りのうちに仕事を続 けなければならないことを決して忘 れてはなりません。このようにしな いと道を誤ってしまいます。|

1973年、何回となく次のように説き 聞かせていました。「いつも祈らな ければなりません。オプス・デイで いつも優先すべきことは祈りです。 仕事を始める前に神に心を向けなさ い。人々があなたたちの信心深さに 気づいたとしても気にしないでくだ さい。あなたたちは、専門家として の準備を滞りなくすませており、そ して全てを主と共にしていることを 分からせなさい。繰り返しますが、 いつも祈らなければなりません。さ もないとファリザイ的な生活になっ てしまいます。|

ある夜、良心の糾明をしようとして いた時に創立者から言われたこととと、 決して忘れることはできません。 がような言葉でした。「ハプスと ではえていったさい。 がで私たちがべってきたことはること ですること、 がいることですが、 です。 人間的手段は全て揃っている 思える時でも、何も持ってはいない のです。祈りこそが、オプス・デイ で唯一、本質的なことです。」

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/sinushi-mo-sheng-kirushi-mo-mu-litazuni/ (2025/11/20)